# 国　語

平成21年度　A

指示があるまで、このページをよく読んで待ちなさい。指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。

Ⅰ　**受験に際しての注意**

1　問題用紙は一ページ（表紙を除く）から十一ページまでである。

2　問題の内容についての質問には、いっさい応じない。それ以外のことがらについて尋ねたいことがあれば、手をあげて監督者に聞くこと。

3　監督者の「はじめ」の合図で始め、「やめ」の合図ですぐやめること。

4　解答用紙が折れ曲がったり、破れたり、汚れたりした場合には、手をあげて監督者に申し出ること。

Ⅱ　**解答記入上の注意**

1　すべてマーク方式で解答を記入すること。

2　マークは必ず**HBの黒鉛筆**を使用して記入すること。ボールペン、万年筆、サインペン等を用いてはいけない。

3　答えは、すべて各問題の指示にしたがって解答欄にマークすること。

4　一度マークしたものを訂正するときは、**プラスチック消しゴム**で完全に消してからマークしなおすこと。消して出たカスはきれいに払っておくこと。

5　次の場合は、いずれも誤答となるから特に注意すること。

(1)　マークの仕方が悪かった場合。（特にマーク欄が塗りつぶされていなかったり、外側に少しでもはみ出した場合）

(2)　問題が要求している以上に余分な答えをマークした場合。

(3)　マークすべきところ以外に印をつけたり、汚したりした場合。特に**枠内**は絶対に汚さないこと。

(4)　訂正の場合の消し方が不十分な場合。

Ⅲ　**氏名等の記入上の注意**

1　問題用紙と解答用紙の両方の所定欄に、漢字で氏名を、算用数字で受験番号をそれぞれ記入すること。

2　解答用紙の左側にある受験番号をマークすること。

| 氏　名 | |
|---|---|

| 受験番号 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|

## 一　次の各問いに答えなさい。

問一　「思いがけず事故にアう」の傍線部の漢字を次より選び、番号で答えなさい。

①　合　②　会　③　遭　④　逢

問二　「呵責」の読み方を次より選び、番号で答えなさい。

①　かしゃく　②　あせぎ
③　あしゃく　④　かせき

問三　「境内」の傍線部と同じ音で読まない漢字を次より選び、番号で答えなさい。

①　京　②　競　③　橋　④　経

問四　熟語として正しい使い方を次より選び、番号で答えなさい。

①　無中　②　温好　③　確心　④　苦悩

問五　四字熟語で□に同じ漢字の入らないものを次より選び、番号で答えなさい。

①　□体□命　②　□変□化
③　□人□色　④　以□伝□

問六　「けがの功名」とほぼ同じ意味のものを次より選び、番号で答えなさい。

①　うそから出たまこと　②　棚からぼたもち
③　豚に真珠　④　石橋をたたいて渡る

問七　「卯月」とは何月の事か、次より選び、番号で答えなさい。

①　一月　②　二月　③　三月　④　四月

問八　「かヨワい女性」の傍線部を漢字にした時の総画数を次より選び、番号で答えなさい。

①　九画　②　十画　③　十一画　④　十二画

問九　「立つ□跡をにごさず」の□に入るものを次より選び、番号で答えなさい。

①　人　②　馬　③　鳥　④　猿

問十　送り仮名の間違っているものを次より選び、番号で答えなさい。

①　危(あや)うい　②　承(うけたまわ)る　③　歓(よろ)こぶ　④　俯(うつむ)く

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

はじめのころは学校ではよくいじめられた。ただでさえ東京弁を喋る余所者（よそもの）だった。その上、東京の学校より勉強は簡単だった。自動的に勝利は「勉強のできる子」になり、それはいじめられるもうひとつの原因になった。

A　やがて①勝利の中では、勉強ができることが強味に転じた。東京の学校にいたころはたまたまテストの点が良かったりして先生にほめられると辛いくらいの罪悪感を感じていた勝利なのに、秋田に来てしばらくするとそんなものはきれいサッパリ失くなった。

自分は嘘をついている。

ほんとうなら一学年上にいるはずなのに、ひとつ下のクラスで「良くできる」と言われることに対して何も言わない。

ほんとうは「やさしい」わけでは決してないのに、「やさしい」と言われることに対して何も言わない。

そういった自覚に罪悪感をおぼえることを、努めて殺していくことでやっと勝利は生きていけた。そうして、②「努めて殺している」というような感覚も、何年かのうちには薄れてやがて消えた。

物静かで目立たないほうだった少年は、環境が変わり時が経つにつれて人からは「快活」と呼ばれる種類の少年に変わっていった。不正を隠すためには喋らなければならなかった。人に嫌われないためにも喋らなければならなかった。

理由（わけ）の判らない罪悪感に怯え、余所者といわれて始終ビクビクしていたはずの勝利は、中学に入るころにはクラスの人気者にさえなっていた。自分でも知らないうちに、そういうふうになっていた。

③春先に雪が解け、解けた下にぬかるみが見える。真っ白かった雪が泥の色に冒される。勝利は目を背（そむ）けたくなる。寒さにはうんざりしていたはずなのに、寒さがぶり返すことを祈る。

そうして、季節はずれの春の雪が降ってくれると勝利はホッとする。泥の色を新しい雪が覆い隠してくれるからだ。

秋田には結局、中学校を卒業するまでいた。東京に帰る前に、祖父がふたりきりになった隙をつくようにして言ったことを勝利は今でも鮮明に憶えている。

―カツトシ、よく聞け。

祖父はそう言った。

④―人間なんで、信（すん）じるもんでねえぞ。

十五歳の少年に、このひと言は鮮烈な印象を与えた。大人に「人を信じるな」と真っ向から言われたことは一度もなかった。

ぽかんとした表情のままでいる勝利を見て、祖父は突然そばにあった南部鉄の灰皿を指差して言った。

―お前はこれを、食えると思うか？

勝利は祖父の顔を見、灰皿を見、ふたたび祖父の顔を見た。そうしてから、自信なさそうに首を横に振る。

祖父は頷き、言った。

―んだ。食えるもんでねえ。ふつうなら誰もがそう考える。
祖父の言わんとしていることが判らなくて、勝利は眉根にシワを寄せる。
―それど同じことだ。人間なんで信じるもんでねえんだ。
頭の骨のどこかが割れてそこからパーツと光が射してきたみたいに、⑤勝利は祖父のことばの意味を理解した。
灰皿が食べられないように、人間は信じられないものなのだ。灰皿を食べようとしている人がいたら、誰もがその人は気が違っていると考えるだろう。それと同じように、人を信じようとすること自体が狂気の沙汰なのだ。
B 、もともと人間は信じる対象として適していないものなのだから―。
人の心は変わるのがあたり前だ。自分勝手であたり前だ。それは責められるべきことではなく、もともとそういうふうにできているのだ。
そうして人として生まれたなら、必ずそのことに気付くはずだ。ならばそれを信じよう、信じたいと思うこと自体が変だ。
勝利は祖父の顔を見て頷いた。
―うん、わかった……。
小さな声で言った。

（鷺沢　萠「バイバイ」）

問一 A・B に入るものをそれぞれ次より選び、番号で答えなさい。

① しかし　② つまり　③ なぜなら
④ 例えば　⑤ したがって

問二 ①辛いくらいの罪悪感を感じていたの理由として最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 東京では環境がよいため勉強ができて当然であったから。
② 方言をしゃべることのできない東京弁の余所者だったから。
③ 学年が他の子より一学年上なので勉強ができてあたり前だから。
④ 勉強ができると他の子たちからねたまれていじめを受けたから。

問三 ②努めて殺しているの理由として最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 自分がいきていくため。
② いじめから逃れるため。
③ 明朗な性格になりたいため。
④ 勉強に集中するため。

問四 ③春先に雪が解け、……寒さがぶり返すことを祈るの描写の説明で最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 雪解けは勝利の罪悪感がなくなった事を象徴するものである。
② 季節の到来は今後の勝利を暗示するものである。
③ 雪は勝利の人生を表し、「快活」な自分を印象付けている。
④ 泥は勝利の罪悪感に関する事柄を象徴している。

問五 ④人間なんで、信(すん)じるもんでねえぞの祖父のことばに対して勝利の心情として最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 祖父のことばは自分の経験から見ても納得できるという心情。
② 祖父のことばの真意がはっきりとつかめずにいる心情。
③ 祖父のことばはひどいと感じ大人を軽蔑する心情。
④ 祖父のことばはつらい過去を思い出させつらく悲しい心情。

問六 ⑤勝利は祖父のことばの意味を理解したとあるが、どのように理解したのか、最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 人を信じるということは自分の得にはならない。
② 人の心は即座に変わるものである。
③ 人間は信じる対象としては不適なものである。
④ 人間は自分勝手な生きものである。

問七 この文の説明として最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 少年の心理や祖父とのやり取りが分かりやすく描かれている。
② 十五歳という成長期の少年の生き方がユーモアを交えて描かれている。
③ 家族愛に欠けている少年の悲しさ・寂しさを中心として描かれている。
④ 比喩表現など巧みに取り入れて、友情の大切さをテーマとして描かれている。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

何年間かの医学生だった体験、曲がりなりにもインターン、病院勤めをした体験はむだにはなりませんでした。そういうものがぼくにもっと深く人の命ということを真剣に考えさせてくれたのです。

たまたま教授が主治医だった入院患者にがんの患者さんがいました。その患者さんがいよいよ危篤状態になってしまって、主治医が呼ばれました。「大名行列」と呼ばれるように、教授、助教授、それから医局の人間がいて、最後にわれわれみたいな医学生がずらりと並ぶのです。われわれはいるところがないものですから、部屋の中から追い出されて、廊下に立っているのです。それでも部屋の中のようすがわかります。

肩ごしに、患者さんの顔が見えます。その患者さんをぼくも何度か注射したことがありましたが、たいへん苦しそうな、土気色をしたこの世の人ではないような顔で、がんの痛みに耐えておられたのです。①いよいよ「ご臨終です」と教授が言ったとき、その患者さんの顔がふっと変わったのです。②まるで仏様のような顔になった。それまでしかめっ面して、頬がやせこけてほんとうに見るのも哀れな容貌だったのが、一瞬ひじょうに神秘的な美しい顔になったのです。そして亡くなられたのです。

それを肩ごしに見ていて、「ああ、人間の死というのはこんなものだったのか」と思ったのです。苦しんで苦しんで、苦しみ抜いて死ぬのが人間の死だと思っていたのです。死ぬときにこんなにほっとしたような顔をなさる。もしかしたら死というものは、われわれが頭の中で考えている苦しみを超越したものではないだろうか。何か大きな生命力みたいなものがあって、人間という肉体に宿っているのは、そのうちのごく一部の、一時の期間にすぎない。霊魂というか、③生命体というものは、人間の体を離れたら、どこかに行ってしまうのではないか。別の生活をはじめるのではないだろうか。実際ぼくはそのときにそう思ったのです。それが正しいかどうかはわかりません。しかし、そこで、ぼくは前にも増して［A］というものを直接に感じました。そしてそれから特に生命力というものに関するマンガを描くようになったのです。

『火の鳥』は、一九五五（昭和三〇）年に最初に描き出した作品です。やはりそういうことがきっかけで、マンガでできるかどうかわからないけれど、生命というものを追求してみようということで描き出したものです。これに出てくる火の鳥は鳥ではなく、生命の象徴みたいなものです。この鳥にまつわって登場するさまざまな人間が、一人残らず命に執着している。とにかく死にたくない。永遠の生命力がほしい。若返りたい。そういうことに執着していろいろと苦しむのです。そういうことがテーマになっているのですが、これは言い換えればぼくの煩悩でもあって、ぼくも死にたくない。それをもう一人のぼくが、この火の鳥に姿を変えているのかもしれませんが、「いや、お前だってただの人間なのだ。いずれは死ぬ。だから死ぬまでの生きがいみたいなものをよく体験しておけよ」ということを自分自身に言い聞かせている。そういうようなことかもしれません。

火の鳥が人間によくこういうことを言うのです。「人生五〇年といいます。五〇年も生きていて、そのうえに永遠の生命をあなたはほしいのですか。カゲロウをごらんなさい。カゲロウは羽化しても胃袋がありません。つまり、死ぬまでものを食べないのです。そのくらいわずかな寿命しか生きていないのですが、そのあいだに交尾をし、子孫を増やし、精いっぱい生きて、そして死んでいくのです。わず

か数日の命でも虫は満足して死んでいくのです。④それと同じではありませんか」。これもぼくの自問自答です。

ぼく自身もできたら二〇〇歳でも三〇〇歳でも生きて、そのあいだに世の中がどう移り変わっていくか見たいと思います。しかし、それがかなわないとなれば、せめて人生何十年かのあいだにできるかぎり精いっぱい生きていきたい。少なくとも空襲で死なずにすんだからには、あとはできるかぎりのことをして死にたいという気持ちを持っています。

現在、人間の寿命はどんどん長くなっています。［B］、人間の命というのは一二〇歳ぐらいが限界で、一五〇歳まで生きたという人はまずいない。つまり、どんなに長生きしたと言っても、人間は一五〇歳を待たずしてとにかく死んでしまうわけです。ご存じのとおり、人間の体はたくさんの細胞からできていて、細胞はどんどん死んでいっても、個体は死なないのです。［C］、かさぶたは死んだ組織ですから、取りのぞいてしまえば、そこに新しい組織が生まれます。そういうようにいくらでも再生がきくわけです。

ところが、一つどうしても代替のきかないところがあるのです。脳細胞です。かりにたいへんすぐれたコンピューターがあって、それを脳細胞に取り換えられたとすると、⑤人間は人間でなくなって、ロボットになってしまいます。極端に言えば、体のほかの部分はどういうように取り換えても、脳が現在のまま生身のままで生きているかぎりは、人間は人間なのです。ところが、脳をひじょうに精巧なコンピューターに取り換えてしまえば、その時点で人間は人間でなくなってしまう。

さらに、脳は代替がきかないと同時に、脳細胞は再生がきかないのです。つまり、脳細胞はどんどん滅びていってしまう。いわゆる老人ぼけと言われる方々の脳を取り出してみると、空洞化しています。脳細胞が破壊されて、小さいものになっていて、これでは人間の脳としての役割は果たせません。

脳が死んでしまえば、ふたたび人間は生き返ることができない。そういう脳の死ぬギリギリの限界というのが、一二〇歳だろうと言われているわけです。

人間はひじょうに煩悩が強く、長生きしたい、死んだあと、おれの財産は、遺族は、家庭はどうなるだろうというようなさまざまな悩みにとりつかれながら死ぬまで苦しんでいるのです。それで苦しみがひじょうに大きくて、死ぬときまでつらい。そこでいわゆる信仰とか、さまざまな問題がでてくるわけなのです。

動物を見るとわかるのですが、たとえばカモシカがライオンに襲われる場面をテレビで見ると、カモシカが苦しそうな顔をして死んでいくわけではありません。確かに暴れますが、あるところまで来るとしょうがないというような顔をして死んでいきます。カモシカのほんとうの気持ちはよくわかりませんが、少なくともひじょうに虚心坦懐に死んでいくように見えます。

人間がまだ動物に近かった頃、アフリカや東南アジアのジャングルの中で生活していた頃の人間には、そういう煩悩はあまりなかったと思うのです。おれが死んだあと遺産はと言ったって、遺産はおそらく残さなかったろうし、兄弟はと言っても、おそらくてんでんバラバラに蟄居生活していたと思うのです。そういう生活をしている中で、ひとりぼっちで猛獣に襲われてけがをして死んでいった。しょうがないだろうというような、どちらかというとひじょうにさっぱりした素朴な考えで生命というものをとらえていたと思うのです。

（手塚治虫「ぼくのマンガ人生」）

問一 A に当てはまる語を次より選び、番号で答えなさい。

① 肉体の生命力　② 死の尊さ
③ 医療の進歩　④ 生命の神秘

問二 B ・ C に当てはまる語を次より選び、番号で答えなさい。

① また　② つまり　③ たとえば
④ そして　⑤ しかし

問三 ①まるで仏様のような顔になったの表現技法として最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 直喩　② 隠喩　③ 擬人法　④ 倒置法

問四 ②しかめっ面の意味を次より選び、番号で答えなさい。

① 傷だらけの顔つき。
② 悲しそうな顔つき。
③ 顔にしわを寄せた顔つき。
④ 迷惑そうな顔つき。

問五 ③そのときとはどのようなときか、最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 患者が苦しんで死ぬのを見たとき。
② 患者が家族に見守られ、安心して死ぬのを見たとき。
③ 患者が安堵した表情で死ぬのを見たとき。
④ 患者が苦しまないよう処置されて死ぬのを見たとき。

問六 ④それと同じではありませんかとはどういうことか、その説明として最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 命は期限に関係なく、いかに満足できるかという点で同じということ。
② 永遠の命を求めるのは、カゲロウも人間も同じということ。
③ 人間もたとえ数日の人生でも、命を得たという点でカゲロウと同じということ。
④ 苦しんで死のうが死ぬまいが、命には限りがあるという点で同じということ。

問七 ⑤人間は人間でなくなって、ロボットになってしまいますの理由として最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 脳細胞が死ぬことが、人間の死を意味することだから。
② 人間が自分の意志で物事を考えることが出来なくなるから。
③ 人間はコンピューターの能力には勝つことが出来ないから。
④ 脳細胞が変わると、その人間の人格まで変わってしまうから。

問八 本文中における作者の考えとして最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① 作者は苦しみ抜いて死ぬのが人間の死だと考えている。
② 作者は虫や動物と人間の死は異なるものと考えている。
③ 作者は死を恐れ、命に執着しながらも、人生を精一杯生きようと考えている。
④ 作者は人間の死は脳細胞が死んでも、コンピューターに取り換えてしまえば、死にはならないと考えている。

**四** 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ねぶたしと思ひてふしたるに、①蚊の細声にわびしげに名のりて、顔のほどに飛びありく。羽風②さへその身のほどにあるこそ③いとにくけれ。

きしめく車に乗りてありく者。耳もきかぬにやあらんといとにくし。わが乗りたるは、その車の主さへにくし。

また、物語するに、さし出でして、われひとり④さいまくる者。すべてさし出では、童（わらは）もおとなもいとにくし。※あからさまに来たる子供・童べを、見入れ⑤らうたがりて、をかしきもの取らせなどするに、慣らひて常に来つつ、ゐ入りて※調度うち散らしぬる、いとにくし。

家にても宮仕へ所にても、※会はでありなんと思ふ人の来たるに、そら寝をしたるを、わがもとにある者、起こしにより来て、※いぎたなしと思ひ顔にひきゆるがしたる、⑥いとにくし。※今まゐりのさしこえて、物知り顔に教へやうなること言ひ※うしろ見たる、いとにくし。

（「枕草子」）

※あからさま＝ちょっと。急に。
※調度＝手回りの道具。日常使う道具類。
※今まゐり＝新参者。新入り。
※会はでありなん＝会わないでいよう。
※いぎたなし＝寝坊である。
※うしろ見たる＝世話をしている。

問一 ①蚊の細声にわびしげに名のりてに用いられている修辞法（表現技法）を次より選び、番号で答えなさい。

① 擬人法　② 連鎖法　③ 倒置法　④ 対句

問二 ②さへの「文法的な働き」を選び、番号で答えなさい。

① 限定　② 添加　③ 強調　④ 疑問

問三 ③いとの品詞として正しいものを次より選び、番号で答えなさい。

① 動詞　② 助動詞　③ 副詞　④ 形容詞

問四 ④さいまくる ⑤らうたがりての現代語訳として最も適切なものをそれぞれ次より選び、番号で答えなさい。

④さいまくる

① 先走る　② 早く走る
③ 追い抜く　④ かきまわす

⑤らうたがりて

① 疲れた様子で　② いじめたがって
③ かわいがって　④ あわれに思って

問五 ⑥いとにくしとは作者のどういう気持ちが表現されているか、最も適切なものを次より選び、番号で答えなさい。

① これから宮仕えなのに寝坊をしたところを侍女に見られて恥ずかしい気持ち。
② 寝たふりをしているのを気づかずに起こそうとする侍女に対する不快感。
③ 宮仕えで疲れているのでゆっくり寝ていたいのに起こそうとする、侍女に対する不快感。
④ 寝たふりをしていて、起こしてほしい真意に気づかずにいる侍女に対する不快感。

問六 「枕草子」の作者と同時代に活躍した人物を次の中より選び、番号で答えなさい。

① 松尾芭蕉　② 兼好法師
③ 大伴家持　④ 紫式部